

論文

## 河上肇と古典派経済学

——『近世経済思想史論』を中心として——

杉原四郎

一

欧米の経済学は、幕末の一八六〇年代以降続々とわが国に伝来した。はじめは英・米・仏の自由主義的な経済思想の紹介と吸収がさかんであったが、明治二十年以降は、他の社会諸科学と同様に、経済学においても、ドイツの影響がよくなり、新歴史学派の経済思想が力を得、ついで移入された限界効用学派や新古典学派の経済理論の研究が推進されることになる。古典学派の経済学も欧米の諸経済学の一つとして最も早く伝来し、通俗的な解説書を通じての紹介が中心であったが、スミス、マルサス、J・S・ミルの主著の翻訳もおこなわれて、明治初頭にはかなり普及をみたのであった。二十年代以後官学の講壇でドイツ歴史学派が主流となつてからも、福沢の学統をつぐ慶応や天野為之の指導下の早稲田や田口卯吉の主宰する経済雑誌社などの私学や民間ではひきつづき自由主義

的な経済思想がうけつがれ、古典学派に対する関心もそれとの関連で保持されていた。だが総じて明治末期までは、たとえばスミスならその貿易論、マルサスならその人口論、リカードウならその地代論、ミルならその社会主義論が、個々の時論的関心からとりあげられるという風に、断片的かつ実用的な接近が主であって、古典派の学説そのものに則した内在的、体系的の研究は、漸く明治の末期におよんでその緒についたといつてよい。明治四十四年に公刊された『三田学会雑誌』（第五巻第三号）の「アダム・スミス記念号」<sup>(1)</sup>や、大正五年発行の京大『経済論叢』（第二巻第五号）の「マルサス誕生百五十年特輯号」<sup>(2)</sup>は、この時期のわが国のアカデミックな古典派研究の成果と水準をしめすものであるが、一方ではこのような研究の蓄積をうけつぎつつ、他方では第一次世界大戦後の日本資本主義の新しい発展を背景とする社会経済思想の活潑な動きに刺激されて、大正十年前後になると、古典学派に関するヨリ本格的な研究業績が、続々と出現するにいたる。そしてこの時代における古典派研究の中心として学界に大きな影響力をもっていた指導者の存在が、河上肇にはかならない。

河上肇の経済学者としての経歴について、大正五年九月十二月の『貧乏物語』の公表までを初期とし、大正十三年八月のマルクス研究への新たななる出発以降を後期とするなら、その間に介在する約七年半の期間は、河上の思想が人道主義から科学的社会主義へとうつってゆく中期乃至過渡期として特色づけられるであろう。この間に河上は一方ではマルクスの思想の理論的研究とその普及にとめるかたわら、他方ではイギリス古典学派の学史的 연구に力をそそいでいた。前者の活動が生み出した業績として、『社会問題研究』（大正八年一月創刊）、『唯物史観研究』（同十年）『社会組織と社会革命』（同十一年）があり、後者の研究を総括する成果として、『近世経済思想史論』（同九年）と『資本主義経済学の史的発展』（同十二年）の二つがある。河上の古典派に関する研究は、初期や後期にもみられないわ

けではないけれども、主な業績は中期に集中しており、その代表作がこの二著作なのであるから、河上肇と古典派経済学というテーマをとりあげる場合、おのずからその焦点はこの二つにおかれることになるであろう。

『近世経済思想史論』を『資本主義経済学の史的発展』とくらべて見ると、前者は量的にも後者の約二分の一にすぎぬ小著であり、後者が本格的な学術的専門書の体裁をととのえているのに対し、前者は講習会での講演口調をそのままつした啓蒙的概説的な叙述形式をとっているので、一見両書の質的比重にかなりの差があるように見える。内容的にいても『思想史論』の三年後に公刊された『史的発展』は、前者の古典派概説の部分をうけついでこれをはるかに詳細にかつより立体的な視角からとりあつかっているのであるから、古典派研究という観点からすれば、前者は後者の端緒形態乃至予備的素描と評価することも不当ではないと考えられよう。だが『史的発展』の豊富な内容を統一づけているいくつかの分析視角のうち、最も重要と思われる基本視角は、『発展史論』においてはじめて、河上個人にとってのみならずわが国の古典派研究史上はじめて、確立されたのであり、この基本視角の説明に関しては、『発展史論』の方がより周到かつ鋭利であると思われるのであって、その意味では本書も亦独自の意義を有する著作であり、その特質をあらかじめ理解しておくことなくして『史的発展』をとり上げることは妥当でない。そこで本稿は、『史的発展』の解明を中心とする続稿の前提として、『発展史論』にまず焦点をおいて、河上の古典派研究について考えて見ることにしよう。

註(1) これは『国富論』の出版大約百五十年を記念して刊行されたもので、小泉信三「スミス略伝及国富論諸版本に就て」を巻頭にスミスに関する六篇の研究と一篇の翻譯とを掲載している。

(2) これには内田銀蔵「まるさす先生略伝」を巻頭に人口論に関する十二の研究と文献目録とを掲載しており、福田徳三も「まるさす人口論出版当時の反対論者特に生存権者」を寄せている。

(3) 『三田学会雑誌』と『経済論叢』とともに当時の代表的な経済学の専門雑誌であったその頃の『国民経済雑誌』にも、福田徳三「マルクスの不変、可変資本とスミスの固定、流動資本との関係に就ての研究」(第六巻第六号・明治四十二年六月)をはじめ大正二年までに数篇のスミス研究の論文が掲載されている。

(4) 私がかつて「河上肇博士の労働観」(『経済評論』昭和三十一年一月号)において河上の労働観の変遷をあとづけ、「わが国におけるスミス研究史に関する覚書」(関大『経済論集』第六巻第四号・昭和三十一年七月)の一節で河上のスミス研究を概観した。これらにつづく本稿は、私の河上研究の一環でもあるが、直接にはここ数年來友人と共同研究をすすめているわが国における古典派経済学研究史の整理作業の一部として作成された。

二

明治三十五年(一九〇二年)に東大を卒業した河上は、その後もひきつづいて経済学の研究に没頭していたが、彼の研究の基調もさききのべた当時の官学の支配的傾向を大きく逸脱したものではありません。ただ初期の河上の学問的関心の特色として本稿のテーマとの関連上とくに注目されるべき点としては、第一に、利己主義と利他主義との相剋という人生観上の根本問題が、彼の心をふかくいつも占領していて、それが社会科学上の研究の一つのライトモチーフになっていったこと、第二に、分業や機械化による労働生産力の発展を経済の本質的課題とする彼の見方から、スミスの『国富論』の基本構想への同感が初期の作品にしばしば表明されていること、第三に、<sup>(1)</sup>社会主義思想一般に対する関心がつよく、マルクス主義についても初期からかなりの評価をあたえているということ、の三つがある。第一の点がその後の彼の古典派研究をもささえており、これが『資本主義経済学の史的発展』を構成する基本線の一つである「マニダキルからラスキンへ」という問題意識に直接つらなるものであることは、後年彼自身が『経済

学大綱』の序で告白しているところであるが、第二および第三の点は、後年の彼の古典派研究を生み出す萌芽乃至素地と考えられるものであり、第一の場合ほどの直接的な関連性をもとめることは無理としても、『近世経済思想史論』および『資本主義経済学の史的発展』の最も重要な支柱である「スミスからマルクスへ」という基本視角がうち出される可能性を初期の作品がすでに内蔵していることを示しているといつてさしつかえないであらう。

河上が本格的に古典派の学史研究をはじめるのは、一九一五年（大正四年）に欧州留学から帰るとすぐ京大教授に昇進して経済学史の講座を担当するようになってからである。彼が同年七月『経済論叢』の創刊号に発表した「津村博士の国民経済学原論について」は、当時のわが国の代表的な原論の教科書として版を重ねていたこの書物<sup>(2)</sup>の中のイギリス古典派のとりあつかいがいかに粗雑であるか、ということをも、マルサスの人口論とリカードの価値論とを例にとって批判したものであるが、其後の彼の研究活動は、わが国の古典派理解の従来の水準を一段とひきあげることを中心課題の一つとしたのだ。この方面に関する業績を『経済論叢』への公表順にたどってゆくと、大正五年の「マルサス特輯号」における「マルサス人口論要領」およびマルサス文献目録、翌六年のラスキン<sup>(3)</sup>の「Unto this Last」を読む」（第四巻第四号）と「アダム・スミス伝拾遺」（第五巻第三号）、大正七年のベンサムとジェームズ・ミルをとりあげた「生産政策か分配政策か」（第六巻・第五号）、大正八年の「社会主義者としてのゼー・エス・ミル」（第八巻第四号）と「ミルと労働問題」（同第五号）という風につづく。一方河上の示唆や後援によりあるいはその指導の下に古典派関係の原典の翻訳が新進の学徒によってこころみられ、その成果が<sup>(3)</sup>つぎつぎと刊行されていった。河上はこれらの翻訳にあるいは序を寄せあるいはその紹介の労をとってわが国の学界における古典派研究の振興にこの面からも大いに寄与したのである。

ところでこうした古典派研究と平行して、河上はそのマルクス研究をすすめてゆくが、初期の著作におけるマルクスへの言及が、ほとんど専ら『経済学批判』序文のいわゆる唯物史観の公式の説明にかぎられていたのに反し、中期になると、その取りあげ方が漸次包括的体系的になされるようになる。社会問題研究の第一一〇冊（大正八年一月—十一月）に連載された「マルクスの社会主義の理論的体系」は、弁証法的唯物論という哲学的基礎の説明は全く欠いてはいるが、唯物史観と階級斗争論にもとづくマルクスの社会理論の他に、労働価値説、剰余価値説および資本蓄積論といったマルクス経済学の説明をも含んでいて、彼のマルクス理論が一定の水準に到達したことを示している。かくて河上の研究は、古典派についてもマルクスについても、大正八年頃には、一応の全体的展望をなしている段階にあったといつてよいであろう。彼はそれを八年夏の二つの講習会でこころみたのである。

註(1) 河上の初期の労働観と彼のスミスへの関心との関係をしめす文献として『経済学の根本概念』（明治四十三年）があることは別稿で指摘した（前掲「河上肇博士の労働観」を参照）が、『時勢の変』（明治四十四年）もまたこの点に関して注目される著作である。河上はこの中で物質界の激変にともなう思想界の動播の諸相を問題にしているが、そこで先づ「進化思想起る」としてスミス→マルサス→ダーウインという進化思想の系譜を説明し（一四〇—一四四ページ）、ついで「物質主義起る」としてマルクスの唯物史観をとりあげている（一四五—一四九ページ）。住谷悦治氏はこの点に注目してつぎのようにのべている。「スミス、マルサス、マルクスという論述の方向、思想的構築は、後年の名著として、最も啓蒙的役割を果したといわれる『近世経済思想史論』（大正九年）、およびその発展の所産である『資本主義経済学史的発展』（大正十二年）を思い起こさせるものであり、勝手な想像を加えるならば、後年におけるこの二名著の萌芽、構想は、すでに、この『時勢の変』の論述の中に同じ方向と意図とにおいて示されていたものであるといえるであろう。『貧乏物語』以前の論著ではあるが、むしろ本書が、直接、『近世経済思想史論』と、『資本主義経済学史的発展』とにつながるものであるとさえ想われるのである」（住谷「思想的に見たる河上肇博士」一九四八年・一二六ページ、『日本経済学史』一九五八年・三九一ページ）。わたくしもここにつながりを見出すことは同感であるが、そのつながりは直接的ではなく

間接的なものであると考えた方がよいと思う。内田義彦氏もこの『時勢の変』に注目し、そこでの河上が、それまでの著書よりも生産力観点を明確にし、啓蒙主義的歴史把握を主張することによって、本書には「ブルジョア経済学者河上の論理がつよく前面にでて」いることを指摘している。内田「明治末期の河上肇」(山田盛太郎編『日本資本主義の諸問題』一九六〇年・一九二—一九七ページ)、同「明治経済思想史におけるブルジョア合理主義」(『経済主体制講座』第七卷・一九六〇年・一一三—一六ページ)を参照。

(2) 津村のこの著書の性格については大内兵衛『経済学五十年』上(一九五九年・三六一—三八ページ)を参照。

(3) ラスキン・石田憲次訳『此の後至者にも』(一九一八年)、リカード・堀経夫訳『経済原論』(一九二一年)、マルサス・谷口吉彦訳『人口論』(一九二三年)、ゴドキン・岩城忠一訳『財産論』(一九二三年)などへの序文および「竹内法学士訳『国富論』」(『経済論叢』第一四巻第四号・一九二二年)を参照。

(4) 『近世経済思想史論』の第三講の第一—第三段は、この論文の内容とほとんど重複している。

### 三

河上肇は大正六年の秋大阪朝日新聞に「マルクスの『資本論』」と題する一文を連載したが、その結語としてつきのようにのべている。

「近頃私は又、向う一箇年間に亘る或労作の緒言に、次の如く述べた。——『従来屢々経済学上の聖書と称せられ、或は今も猶、時としては爾か称せられつつあるものが、古今を通じて只二つある。即ち其一はアダム・スミスの『富』にして、其二はカール・マルクスの『資本』である。……思うに『富』も『資本』も、共に著者がその畢生の心血を注ぎしものにて、経済学あってこのかた、過去百五十有余年の間、此の如く長年月に亘る努力の結晶に成れる著書は、未だ曾て他に見ざる所であるが、之と同時に、其の経済社会に及ぼせし影響に至っても、他に之と比肩

すべきものは全く無い。今日經濟學に関する學說又は學派は、種々の關係に於て種々に分れて居るけれども、若し社會組織の根本原則に関する見解の異同に依つて分つならば、吾人は之れを大別して、個人主義の經濟學と社會主義の經濟學との二派と爲すことを得。而して此二派の中、其一は源をアダム・スミスの『富』に發し、其二は源をカアル・マルクスの『資本』に發すと言ふも、甚だしき過言では無い。されば吾人にして若し、此の『富』と『資本』とを十分に研究せんか、吾人は之に依りて、略經濟學上の根本思潮に通ずることを得」と。——私は今之を借りて此篇の結語と爲し、茲に姑く筆を擱かんとするものである。」

ここにいわゆる「向う一箇年間に亘る或勞作」とは何を指すかは、それが公刊されなかつたために確認することはできないが、經濟學を、資本主義經濟に対する賛否の基本的立場によつて、スミスを始祖とする個人主義經濟學と、マルクスを創設者とする社會主義經濟學とに二分するという河上の構想がすでにここに確立していることはあきらかである。そしてこのような構想にもとづく兩派の概説は、大正八年の夏期講習に彼が出講したことを機縁として、その骨子を平易に講述するといふかたちで一本にまとめられ、翌九年『近世經濟思想史論』として公刊されることになつたのである。

本書はこの相對立する二つの經濟學について、「双方とも成るべく公平に、同じ程度の強さを以て、其要点を説く」(『史論』三五七ページ、以下本書からの引用はページの数字のみをしるす)ことを意圖としているが、兩者を並列的にとりあげるのではなく、「個人主義經濟學が既に成立完成を告げ、正に動搖改造の機運に向つた際に及んで、社會主義的思想は、大体に於て個人主義經濟學の理論を承継しつつ、而かも之を發展せしめ徹底せしむることに依り、始めて科學的の根柢を得、社會主義經濟學とも謂うべきものを組織するに至つた」(二)といふ事情を、經濟思想史



的にあきらかにすることを目的としている。中期の河上は資本主義経済学と社会主義経済学とのそれぞれの学史を姉妹篇をなす一対の著書に書き上げる計画をもっていた<sup>(2)</sup>——そしてその計画は結局半分だけしか実現されなかった

——が、本書はこの計画の原型をしめすものといつてよい。したがって一方では第一講「アダム・スミス」につづいて第二講「マルサス及びリカード」があつて個人主義経済学の発展があとづけられ、他方では第三講「カール・マルクス」の第一段「社会主義経済学の成立」において、空想的社会主義から科学的社会主義への社会主義思想の発展がたどられており、それらの叙述を通じて二つの経済学の継承関係の解明に力がそがれているのである。しかし個人主義経済学の基本性格はスミスを通じ、また社会主義経済学のそれはマルクスにしたがつて説かれており、この両者の思想を対照的にとりあげることによつて両者のしたがつて二つの経済学の異同と関連とを浮彫りすることにこそ本書の重点がおかれているのであつて、この意味では「スミス対マルクス」という基本問題を通じて「スミスからマルクスへ」<sup>(3)</sup>という史的系譜をあきらかにすることが本書のねらいであつたといつてよからう。そこでこのよつた本書の性格を把握するための一助として、つぎに第一講と第三講との篇別構成を対照してみることしよう。<sup>(4)</sup>

〔一〕内は対照の便宜上わたしが叙述の内容にしたがつて補足したものである。

第一講 アダム・スミス

第一段 近世経済学の成立

第二段 資本主義的経済組織の是認〔理論〕

第一 資本主義的経済組織の成立に対する考察

(一) 進化論的必然論

(二) 利己的人間性論

河上肇と古典派経済学(杉原)

第二講 カール・マルクス

第一段 社会主義経済学の成立

第二段 唯物史観理論

第一 緒言

第二 社会進化論

第三 階級争闘説

関西大学『経済論集』第十二巻第一号

第二 資本主義的経済組織の作用に対する考察

(一) 生産面の考察

(二) 分配面の考察

(三) 自由競争論

第三段 自然的自由主義〔政策〕

第一 緒言―近世デモクラシーの發達

第二 アダム・スミスの自由放任論

第四 総括

第三段 資本主義的経済組織の批評〔理論〕

第一 労働価値説

第二 剰余価値説

第三 資本主義的経済組織の必然的崩壊

第四段 社会民主主義〔政策〕

第一 マルクスの必然論と政策論との關係

第二 社会民主主義とは何か

第三 政策實現の手段としての階級争闘

註(1) この「マルクスの『資本論』」は『社会問題研究』(一九一八年・大正七年)に収録された。同書四六一四八ページ。

(2) 『資本主義経済学の史的発展』五五九―五六〇ページ参照。

(3) 住谷悦治氏も本書の解題の中で「本書の發刊予告サブ・タイトルに「アダム・スミスよりカール・マルクスへ」と示されていることに注目すべきである」とのべている(アダム・スミスの会編『本邦アダム・スミス文獻』一九五五年・五〇ページ)。住谷氏の一文は、本書の内容を的確に要約するとともに、その時代的背景やスミス研究史上の意義についても適切な解釈をくだしている好解題である。

(4) 第二講「マルサス及びリカード」については、続稿で『資本主義経済学の史的発展』をとりあげるときにあわせて問題とすることにする。

四

右の対照から知られるように、河上は両者の思想を比較する場合、まづ理論と政策との二つに分け、さらに理論を、資本主義的経済組織の成立の由来に関する認識とそれの現実の機能に関する認識とに二分し、それぞれについ

て検討を加えているのであるが、これらを一貫して河上が強調する点は、「元と社会主義の経済学は個人主義の経済学に反対して成立したものであるから、両者は全然反対の観方を執って居るもののように予想せられるのであるが、実際に於ては決してそうでない。少くとも個人主義経済学の創設者たるアダム・スミスは、社会主義経済学の創設者たるカアル・マルクスと、唯結論が相違するだけであって、物の観方は大變に克く似て居る」(一七)ということである。すなわち、第一に、現代経済組織の成立に関する見解について見れば、スミスの考え方は「凡て社会組織は一定の期間進化の過程を経て出来上った所の一個の歴史的産物であることを主張した」(一八)マルクスのそれとほぼ同じであって、主観的な希望に応じて自由に将来社会をつくり出しうるとした空想的社会主義者達よりスミスの方がはるかにマルクス的である。「唯マルクスは現代の資本主義的組織が既に爛熟して各方面に様々の弊害を生じた時代に生れたからして、そこで歴史的進行の必然の結果として現代の経済組織は遠からず崩壊し之に代つて社会主義の経済組織生るるに至るべし、と云う将来の予想に重きを置きたるに反し、スミス……は資本主義發達の初期を見たるに止まり、未だ此組織の缺陷を窺るに至らざりし為に、そこで、彼は毫も此組織の改造を希望することなく、随て彼は現代の社会組織が歴史的進化の必然の結果として生れ出でたるものなりという点にのみ重きをおき、専ら其組織の如何に巧妙なるかを説明するに忙しかった」(一八一—九)という結論の違いが生じたにすぎない。河上はこの点にまず読者の注意を促した後、スミスの必然論の根底には人間性に関する特定の見解が潜んでゐることを指摘し、この点はマルクスの場合も全く同様であって、「人間の性質は斯の如きものであると云うことを前提として、そこから出發するというと、初めて一のサイエンスが成り立つ」のであるが、スミスの場合はそれが「人間はすべて自己の利益を圖らんとするものである」(二四)という見方であり、マルクスの場合は「人間は其生

活に必要な貨物を社会的に生産するに当っては常に生産力の発展に対する社会組織の人為的束縛に反抗するものである」(二二)という見方であることがことなっていると述べている。第二の資本主義の作用に対する認識については、スミスはその積極的な面を是認し、マルクスはその暗黒面を暴露するという風に全く正反対となる事は当然であるとされるが、同時にそのマルクスの資本主義批判の結論が導き出される前提としての経済理論たる労働価値説および剰余価値説と「殆ど同じ」(二四〇)ものがスミスやリカードにあり、マルクスの理論は、リカードに依って「略ぼ完成されたと云っても差支ない」(二四〇—二四一)個人主義経済学を「少しく発展させただけのことである」(三四五)とされる。さらに、第三の政策論についてもみたび両者の考え方の本質的同一性が強調される。すなわち河上によれば、スミスの自由主義は、「社会の少数者に依って独占されて居る所の自由をば、それ等の人々から奪って之を多数者の享有に帰せしむるといふ……デモクラシーの運動の第一期の事業」(五九)を完遂しようとするものであるが、このような自由が第三階級によってえられた後は、「平等がデモクラシーの要求となり、……資本家階級の自由を制限することによって社会全員の平等を実現せんとする」(六〇)ことが、デモクラシー運動の第二期の事業となる。しかもその事業を完遂しようとしてマルクスのとなえるソシアル・デモクラシーは、「能く考えて見ると、最初アダム・スミスの唱え出した自由競争論、独占反対論を唯徹底せしめただけの主張である。……故にスミスの理想とマルクスの理想との間には、実はさしたる差異はないのである。只第一期の民主主義を徹底せしめて、第二期の民主主義としたまでのことである」(三五二—三五三)。スミスとマルクスとの対比をほぼ以上のように説明することを通じて、「スミスよりマルクスへ」という本書の基本線がうち出されてくるのであるが、最後にこの点を河上自身のことばで要約しておくことにしよう。

「凡て物の成長発達と云うものは、それ自身の中にそれ自身を破壊すべき要素を準備して来るものであって、之は社会組織に就て言うても、社会思想について言うても、凡て同じことである。要するに資本主義の経済学は、アダム・スミス、マルサスを経、リカードに至るに及んで略ぼ完成したのであるが、而かも其完成の刹那、既に其母胎内には遠からず社会主義の経済学を生むべき十分なる準備を整えたるもの、と見るべきである」。(二四一)

註(一)この点は河上「マルクスの唯物史観に関する一考察」(『経済論叢』第九卷第四号・大正八年十月——『唯物史観研究』大正十年に『唯物史観と必然論』と改題して収録——)の中で詳論されている。

## 五

さきに見たように、河上は本書において二つの経済学のいずれにくみすることもなく、双方それぞれの主張を公平に紹介して読者の判断に供するだけだとのべているけれども、マルクス経済学の成立の歴史的必然性とその民主主義的性格とを説明することによって、これを異端視乃至危険視する世論の蒙をひらくことが著者のねらいであったことは、以上の要約からもあきらかであろう。『貧乏物語』の公刊と本書の出版との間の三年のうちに河上の思想的立場は大きく前進し、科学的社会主義への理解と共感を急速にふかめつつあったが、本書の基本視角も彼のような新しい立場に照応するものであった。それとともに、当時の彼のマルクス理解の限界がその古典派把握を制約し、古典派経済学とマルクス経済学との共通性を一方的に強調するに急であり、両者の質的差異を軽視し、古典派理論の階級的性格の解明がきわめて不十分に終ると同時に、マルクスの経済学批判の意義を埋没させる結果となつてゐることも事実であつて、<sup>(2)</sup>この点は公刊直後に榎田民蔵がその書評で的確に指摘している通りである。<sup>(3)</sup>この

点はその後の河上自身のマルクス研究の進展とともに克服されてゆくのであるが、さしあたり『資本主義経済学』の史的発展』においては、本書で確立されたこのような「スミスからマルクスへ」という視角からの古典派把握はほとんどそのままこまれていってよいであろう。それどころか、『発展』の場合は、『史論』とちがって、資本主義経済学のみをとりあげているために、二つの経済学の相互関係が『史論』ほど明確に表面化されていないのみならず、資本主義経済学の発展をあとづける場合においても、「スミスからマルクスへ」という『史論』での視角の他に、「マンダキルからラスキンへ」と「ヒュームからミルへ」という他の二つの視角があって、この三者がからみあいながら叙述が展開されるという複雑な構成をとっているために、一そうこの点があいまいになっているうらみなしとしない。詳しくは続稿の問題として、ここでは最後に、『史論』がこのような視角から書かれたわが国における最初の古典派の通史であること、そしてこの点を明確に直截に説明することによって古典派経済学に対する一般的関心を著しく高め、わが国の古典派研究の新しい段階を招来する上に大きな役割りを果たしたという意味で、『史論』は決して単なる『発展』に解消されてしまえない独得の意義をもつものであることを確認しておきたいと思う。

註(1) この間の河上の急速な思想的展開をしめす若干の指標をかかげておくと、(一)「私がマルクス以外の学派からマルクスに移らんとした最初の出発点における記念の作物である」(『社会問題研究』第四十七冊・大正十二年八月・一六八—一七一)とされる「剰余価格の成立」の発表(『経済論叢』第七巻第一号・大正七年七月)、(二)「マルクスの『資本論』」を巻頭においた雑文集『社会問題管見』の公刊(大正七年九月)、(三)「今後出来得るかぎり、大学教授の地位を利用しながら、社会主義の宣伝をしてやろうと腹を決め」(『自叙伝』五・二五九—二六〇)で大正八年一月に創刊した個人雑誌『社会問題研究』、(四)『社会問題管見』の旧版からラスキンやスマート等に関するものを削除してマルクス関係のものを加えて改組した新版の刊行(大正九年三月)。私が本稿の二の註1で『時勢の変』と『発展史論』とのつながりを直接的ではなく間接的に

あるとしたのは、この間の河上の思想的発展を重視したいためにほかならない。

(2) 大正八年度における河上の『経済原論』の講義がどのような論理構造をもっていたかということが、当時の聴講学生  
の一人であった松方三郎氏によって報告されている(松方「大正八・九年頃の河上先生」、『回想の河上肇』一九四八年・  
二二—二四ページ参照)が、それによると、当時の河上の経済学には「人類ハソノ物質的生産ヲ創造スルガタメニ相  
互ノ間ニ於テ一定ノ関係ニ入り込ムモノナレドモ、今ソノ関係ヲ研究スル学問コレ即チワガ経済学ナリ」という講義の冒  
頭の文字が示唆するように、すでにマルクス経済学の影響がうかがわれはするものの、第一篇「生産及び労働」、第二篇  
「交換及び価値」、第三篇「貨幣及び価格」、(第四篇「分配と所得の問題」というその篇別構成が語っているように、  
なおほるかに『資本論』体系とはへだたった性格のものであったことがわかる。

(3) 榊田の書評は『著作評論』第一巻第四号(大正九年七月)に載り、後全集第一巻『唯物史観』におさめられたが、批評  
の骨子は、マルクス主義思想の根本を貫くものは、河上のいうように階級斗争説ではなく、むしろ弁証法的な事物の見方  
ではないか、という点と、正統派経済学とマルクス経済学とは、後者が唯物史観にもとづくものであるのに前者がそうで  
はないというところに決定的な差異があるのに、河上はそれを看過しているという点との二つである(全集第一巻一八—  
二五ページ参照)。